



事故対応を変革するテレマティクス損害サービスシステムを構築 外部との連携を IBM Cloud 上の API 連携基盤でスピーディーに実現

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社（以下、あいおいニッセイ同和損保）は、先進テレマティクス*技術を活用し、事故の自動検知や走行データとAIによる事故状況把握、客観的な情報に基づく過失判定サポートなどを行い、自動車事故への対応を大きく変革する「テレマティクス損害サービスシステム」の構築を進めています。この中では、システムの各機能と外部の地図や天候情報サービスなどとの連携を行うAPI連携基盤の早期確立が鍵となりました。同社は、IBM Cloud上にIBM API Connectなどを用いて構築されたIBMのAPI連携基盤を採用。わずか5カ月で導入を完了させ、システムの段階的な完成に合わせて連携規模を拡大しています。

- 【導入製品・サービス】**
- API連携基盤 (IBM Cloud、IBM API Connect、IBM DataPower Gateway を活用)
 - GBSコンサルティング・サービス
 - API開発支援サービス



課題

- テレマティクス損害サービスシステムの構築に際して、外部とのサービスやデータ連携を行う拡張性の高いAPI連携基盤を短時間で開発

ソリューション

- IBM API ConnectとIBM DataPower Gatewayを用いてIBM Cloudベアメタル・サーバー上に構築されたAPI連携基盤を活用し、5カ月でサービスイン

効果

- 高い拡張性とセキュリティーを備えたAPI連携基盤を短時間かつ低コストで実現
- 将来的にAPI開発を内製化し、スピーディーかつ低コストで連携規模の拡大が可能

【お客様課題】

外部のサービスやデータと柔軟に連携する API連携基盤の早期立ち上げが鍵

MS&AD インシュアランス グループの中核事業会社として、自動車保険をはじめ各種の損害保険商品を提供しているあいおいニッセイ同和損保。クルマのコネクティッド化や自動運転技術の発展などにより自動車社会が大きな変革期を迎える中、同社はテレマティクス技術の積極的な活用によって市場や顧客のニーズに迅速に応え、安全・安心なクルマ社会の実現に向けて貢献していくと社 理事 IT 統括部長(2020年3月現在)の沼田 俊彦氏は話します。

「例えば、ドライブレコーダーを介して取得する各種データを分析してドライバーの運転特性を把握し、保険料の割引や安全運転のサポートなどを行う『タフ・見守るクルマの保険プラス』で交通事故の未然防止を目指す一方、万が一の事故の際にもお客さまを迅速にサポートする24時間365日事故対応サービス『I'm ZIDAN』を提供しています」(沼田氏)

このアプローチをさらに発展させ、クルマから収集した各種データを利用し、より高度な事故対応サービスを実現するために、同社が2018年から開発を進めているのがテレマティクス損害サービスシステムです。

「テレマティクス損害サービスシステムでは、センサーで事故発生を自動検知して当社からお客さまにご連絡し、必要に応じて救急車両を手配します。また、収集したデータをAIで解析することで、事故状況を正確に把握し、事故相手と客観的な情報を用いた迅速かつより適切な過失・示談交渉が可能となります。これにより事故発生から対物賠償保険金のお支払いまでの日数を約50%短縮することを目指します」(沼田氏)

テレマティクス損害サービスシステムは、クルマから収集した各種データを基にした「テレマティクス情報の可視化」、「事故検知の高度化」、「事故状況の把握」、「過失割合の判定サポート」の4機能に加え、地図や天候情報などの外部サービスや車載デバイスメーカーとの間でAPIを介したサービス連携を実現する「API連携基盤」によって構成されます。

同社は高品質かつ短時間でシステムを構築するために、4つの機能の開発を各領域を得意とする国内パートナー各社に委託。一方、API連携基盤については、社外のクラウド・サービス(SaaS)で実現する方針を固めました。その背景には、“短期導入”と“拡張性”という2つの重要な要件があったと同社 IT 統括部 デジタルITグループ 課長補佐の石田 和人氏は話します。

「API連携基盤は4機能の前提・土台となることから早期の立ち上げが必要ですが、自社開発では時間がかかります。また、今後システムの利用拡大に伴って接続するクルマやサービスが増えれば、必要なシステムリソースも増大します。SaaSであればそうした変化に柔軟に対応しながらシステムを拡張していけると考えました」(石田氏)

【ソリューション】

豊富な採用実績で短期導入が可能な IBM Cloud 上のAPI連携基盤を採用

API連携基盤の選定に際し、あいおいニッセイ同和損保は前述の2つの要件に加えて「豊富な実績」、「高いセキュリティ」、「自社での連携設定や運用が可能な使いやすさ」、「最新技術への速やかな対応」、「広範な機能性」、「堅牢性」などの要件を掲げ、第三者機関による評価が高い3社のソリューションを候補に据えました。

その候補の1つが、SBI FinTech Incubation 株式会社(以下、SBIFI)が提供するSaaSを活用したIBMのAPI連携基盤でした。SBIFIのSaaSはAPI管理・運用ソフトウェア「IBM API Connect」とセキュリティ・ゲートウェイ製品「IBM DataPower Gateway」、およびFintech向けAPI群「FinTech共通API」を用いています。稼働インフラは世界の多くの金融

テレマティクス損害サービスシステムの全ての機能はAPI連携基盤を通じて外部サービスなどと連携するため、これなくしてはシステムとして成り立ちません。



あいおいニッセイ
同和損害保険株式会社
理事
IT 統括部長(2020年3月現在)
沼田 俊彦氏

機関で採用されるなど、堅牢なセキュリティと高い処理性能、信頼性を備え、各種の業界標準に準拠したIBM Cloudのベアメタル・サーバーを利用しています。

あいおいニッセイ同和損保は各社のソリューションを詳細に調査・比較した末、2018年10月にSBIFIのSaaSを活用したIBMのAPI連携基盤の採用を決めました。その理由を、沼田氏は次のように説明します。

「IBM API Connectは国内外のさまざまな業界で豊富な実績を有し、これを使ったSBIFIのSaaSも多くの金融機関で利用されているほか、IBM Cloudは金融情報システムセンター（FISC：The Center for Financial Industry Information Systems）の安全対策基準にも準拠するなど高い信頼性を備えています。また、他社のサービスは少なからずカスタマイズが必要なのに対し、IBMのAPI連携基盤では簡単な設定を行えばすぐに使えるため、より早く導入可能で、開発コストを抑えられることも大きな魅力でした」

加えて、石田氏はAPI連携の設定や運用管理などが簡単に行えることも大きな評価ポイントだったと振り返ります。

「API連携基盤はテレマティクス損害サービスシステムで利用するほか、外部サービス連携が必要な他のシステムでも活用したいと考えていましたが、その際の設定作業などを全て社外に委託しては時間もコストもかかります。IBMのAPI連携基盤には使いやすいGUI環境が用意されており、いずれはそれらの設定作業を自社で行い、スピーディーかつ低コストで外部連携を拡大していけると考えました」（石田氏）

IBMのAPI連携基盤には使いやすいGUI環境が用意されており、いずれはそれらの設定作業を自社で行い、スピーディーかつ低コストで外部連携を拡大していけると考えました。



あいおいニッセイ
同和損害保険株式会社
IT統括部 デジタルITグループ
課長補佐
石田 和人氏

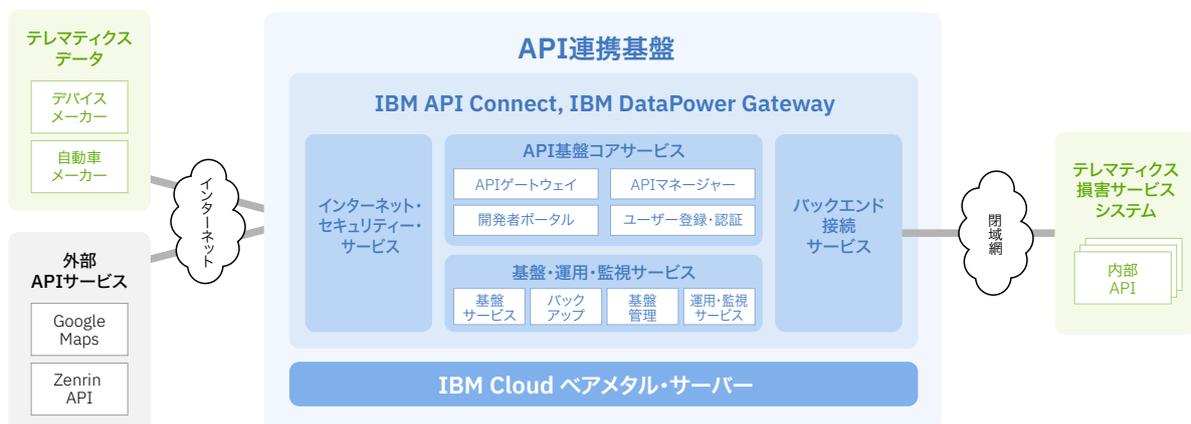
【効果/将来の展望】

5カ月で短期導入、 外部サービスとの連携規模を順次拡大

あいおいニッセイ同和損保は、2018年11月にIBMのAPI連携基盤の導入作業を開始。IBMのAPI開発支援サービスにより、4つの機能のAPI外部公開および外部Webサービスとの連携設定などを実施し、5カ月で導入を完了させると、2019年4月より運用がスタートしました。

「最初は3つのAPIを介した1種類のデバイスとの連携から始め、現在（2020年1月時点）は約20個のAPIを介して4種類のデバイスと連携しています。20万台を超えるクルマのデータや外部サービスのデータをAPI連携基盤を通じてリアルタイムに取得しており、

テレマティクス損害サービスシステム API連携基盤構成イメージ





左から石田氏、沼田氏

IBM Cloud を含め、API連携基盤の安定性を実感しています。半年以内にAPIと連携デバイスの数はそれぞれ倍増していることでしょう」(石田氏)

また、4つの機能の開発は2018年10月に始まり、STEP1として進めた「テレマティクス情報の可視化」が2019年4月、STEP2の「事故検知の高度化」が2019年10月より業務利用を開始。STEP3以降となる「事故状況の把握」と「過失割合の判定サポート」の2機能については2020年度上期の完成が予定されています。

「あいおいニッセイ同和損保の社運をかけたプロジェクト」(沼田氏)でもあるテレマティクス自動車保険の販売は目下、好調に推移しています。契約件数やサービス内容の拡大に伴って連携するデータやデバイスの規模は拡大していきますが、CPUやメモリーなどのリソースの迅速な増設や性能向上が可能なIBM Cloud ベアメタル・サーバーの拡張性は「ビジネスの拡大にしっかり対応できると期待しています」と沼田氏。今後は他の商品やサービス、および同社のレガシーシステムで外部連携が必要となった際や、同社が外部にAPIを公開する際にも、API連携基盤を活用することを検討しています。

順調に進むテレマティクス損害サービスシステムの開発に対するIBMの貢献を沼田氏は高く評価します。「全ての機能はAPI連携基盤を通じて外部サービスなどと連携するため、これなくしてはシステムとして成り立ちません。それを短期間かつ低コストで実現していただいたことには感謝が尽きません」(沼田氏)

一方、石田氏は「これからはSaaSを広く活用したいと考えており、今回のSBIFIのSaaSを活用したIBMのAPI連携基盤のようなラインアップの拡充をご検討いただきたいと考えています」とIBM Cloudへのさらなる期待を語ります。同社は今後もより安全・安心なクルマ社会の実現に向け、先進技術の積極的な活用を進めていきます。

MS&AD あいおいニッセイ同和損保

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社

〒150-8488 東京都渋谷区恵比寿1-28-1

<https://www.aioinissaydowa.co.jp/>

MS&ADインシュアランスグループの一員として、全てのお客さまに高品質な商品・サービスをお届けし、1人ひとりのお客さまからの確かな信頼を基に発展する企業を創造します。先進的なICTとテレマティクス、モビリティ技術を活用した新たな保険サービスの開発・提供などを通じて「先進性」、「多様性」、「地域密着」を追求し、「特色ある個性豊かな会社」の確立を目指しています。



©Copyright IBM Japan, Ltd. 2020

〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21

このカタログの情報は2020年3月現在のものです。仕様は予告なく変更される場合があります。記載の事例は特定のお客様に関するものであり、全ての場合において同等の効果が得られることを意味するものではありません。効果はお客様の環境その他の要因によって異なります。製品、サービスなどの詳細については、弊社もしくはビジネス・パートナーの営業担当員にご相談ください。IBM、IBMロゴ、ibm.com、DataPower、IBM API Connect、およびIBM Cloudは、世界の多くの国で登録されたInternational Business Machines Corp.の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれIBMまたは各社の商標である場合があります。現時点でのIBM商標リストについてはwww.ibm.com/legal/copytrade.shtmlをご覧ください。